

結晶成長 国際会議 裏方記

遠藤 祐二

はじめに 第4回結晶成長国際会議(4th International Conference on Crystal Growth, ICCG-4)が1974年3月24-29日の間東京で開催された。ICCGは1966年にポストンで開かれた会議を第1回とし以来第2回がパーミングム(1968) 第3回マルセイユ(1971)とほぼ3年毎の会議を重ね 第4回目を東京に迎えたわけである。ICCG-4の東京開催が内定したのはパーミングム会議の前後と聞いている。これを受けてそれまで各分野でバラバラに活動していた結晶成長に関係する国内の研究者を一堂に会せしめる場として 結晶成長国内会議が1969年から毎年催されることになった。また マルセイユ会議の前には ICCG-4を受け入れるための組織委員会が発足し 会議開催のための準備が着々と進められてきた。

会期も間近にせまった73年の10月 筆者は組織委員会傘下の会場小委員会の一員を命ぜられ ほんの一部ではあるが会議運営の一端を担当させられることになった。その関係で 数回に渡る実行委員会の末席をけがし 国際会議開催に際しての受入側の苦心と緊張感とを直接肌で感じる機会を得た。会場小委員会は 登録業務 会場運営など会期中の参加者のあらゆる便宜をはからう文字通りの裏方委員会である。そのため 会期前はもとより 会期中においても 表には現れないいろいろな経験をした。以下は舞台裏からみた国際会議の印象記である。

会議前 今度の会議は経団連会館(主会場)とパレスホテル(登録および開会式)の2会場にまたがっている。したがって 両会場間の移行の問題やそれぞれの設営交渉など 1会場でやる場合より余分の手数がかかり それだけ仕事量は多くなる。そこで委員の間で各自の分担を決め 委員会の席で相互の連絡をはかる方式がとられた。筆者の分担は開会式および閉会式の演出それにパレスホテルとの連絡窓口であった。実行

委員会での方針が最終的に決まるまでには何かと紆余曲折があり その度に各委員は自分の持場での変更 修正を計らなければならなかった。こうして各担当者から出された資料をもとに 運営の細目を記した「会場ハンドブック」なる小冊子が作られたが これは会期中非常な効力を発揮した。会期直前の3月23日 最後の実行委員会が持たれた。やり直しのきかないぶっつけ本番を明日からに控えて いいようのない緊張感を覚えたことは今も印象に新しい。以下会期中の記述は筆者の日記風メモからの抜粋再録である。

3月24日 会議参加者の登録受付は パレスホテル高砂の間で午後2時から始められることになっている。ICCG-4の開幕である。高砂の間の設営には筆者も責任があるので 10時頃には現場へ行く。登録業務担当委員の細部の要求や変更について ホテル側の責任者との交渉にあたる。正午前 登録受付室の準備は終了した。会場委員もほとんどが姿をみせ 各デスクに配置されるアルバイトへのオリエンテーションも終わった。後は受付開始の2時を待つばかりである。筆者は私用のため一時現場を離れた。

夕刻 再度現場の様子をみに行くと 外人関係の登録はかなり進行していたが 折から日曜日とあって 国内参加者の登録は予想通りはかばかしくなかった。

夜 明日の開会式が行なわれるローズルームでの設営作業に立会う。予想以上に立派な正面演壇のできばえに満足する。照明 音響担当のホテルの人との細目の打合せを終えた時は10時に近かった。

3月25日 いよいよ会議の幕開けである。開会式は午前10時半からであるが 昨日に引き続き 朝9時から登録受付が行なわれているので 参会者の出足は早い。9時45分から式場内にはレコード音楽が流れ始める。曲目は長沢勝俊作曲「人形風土記」と「子供のための組



写真1 登録受付風景(パレス・ホテル)

曲」。日本特有の各種楽器の演奏による民俗色豊かなそれだけで適当に西洋風な曲で 学習院大の宮崎さん苦心の選曲によるものである。10時25分 打楽器の連打が曲のクライマックスを告げる中を IOCG および組織委員会の要人がヒナ壇席に位置を占め 700 席の場内もほぼ満員となった。音楽が次第に低くなり それに合わせて場内の照明もしぼられてゆく。一瞬場内は暗転し ざわめきもピタリと止った。再度照明のもどるのを合図に 司会役の有住総務幹事が立上り 開会を宣告した。最初は 越智学術会議会長の日本語による挨拶（有住教授の英訳）次いで橋口組織委員長のコモアに富んだ歓迎の辞が会場の雰囲気をやわらげる。最後に IOCG 会長フランク教授の答礼があって 開会式は定刻通りに終了した。

10分間の休憩の間に 次の開会講演の準備がバタバタと行なわれる。講演者であるフランク教授のスライドが新式のプロジェクターの規格に合わず 慌てさせられる一幕もあったが 旧式の物を万一の用心に用意していたのが幸して事無きを得た。定刻11時 橋口教授の司会でフランク教授が登壇した。演題は「雪の結晶の形」雪華図説を編んだ土井利位 世界にその名を知られた中谷宇吉郎らの伝統を持つ 日本の雪の結晶の研究に敬意を払った講演であった。終了後橋口教授の紹介で 招待席におられた中谷先生のお嬢さんが壇上に上り フランク教授と握手 万場の拍手をあげた。この間 登録業務の窓口は経団連会館へ移動 会議の場は同会館へ移され 午後からは3会場に別れての講演会が始まった。

3月 26日 この日は春闘の統一行動日にあたり 首都圏では国電を除く各交通機関は半日のストライキを行なった。このため 会場内でのアルバイト確保のため 一部の人たちを会場付近のホテルに宿泊させるなど 対応策を構じなければならなかった。幸にして 心配された講演者の遅刻などの問題は1件もなく 9時から

の会議は予定通り進行し 関係者一同をホッとさせた。会議開始の頃から 財界の総本山である経団連会館の前には デモの人並が続々とおしかけはじめ インフレ反対を叫ぶシュプレヒコールが午前中いっぱい会館を包んでいた。

午後のC会場では 筆者に関係の深い天然鉱物の結晶成長に関するセッションがあり 10編の講演があった。日本人の講演が多く 外人参加者からの質問につまる人もあったが 場内から砂川教授の適切な助け舟が要所に出され 座長のベダリーダ教授から感謝の言葉が送られたり 英語がまったくだめというソ連人の露文演旨をフランス人が英語で代読 質疑応答の通訳を行ない 国際友好の見本とほめ上げられるなど 楽しいセッションであった。

3月 27日 昨夜から降りはじめた雨が 夜半から雪に変わったらしく 朝からひどい吹き降りの1日であった。昨日とは違った意味での交通マヒが心配されたが 会議の進行には影響は出なかった。雪の結晶は今度の会議のシンボルマークであり また フランク教授の開会講演も雪にちなんだ話であったことでもあり 時ならぬ天の演出に感謝すべきなのであろうが このドカ雪では多少演出過剰の感はまぬがれない。

この日A会場の夕方のセッションには 16mm映画による5編の発表があり 参加者の人気を呼んだ。このため 平行して講演の行なわれた他の2会場は参加者が激減し 後で苦情が出たという話を聞いた。

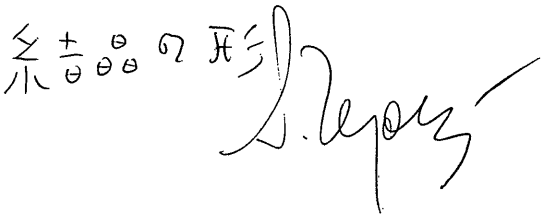
夜7時から2件の特別講演があった。最初はベルギーのアメリックスによる “The Characterization of Defects in Crystals” で 結晶中の種々の欠陥をとらえた数10枚におよぶ美しい電子顕微鏡写真のスライドがアメリックスのやや早口ながら折目正しい話しぶりとあいまって 満員の場内を魅了した。二番目に登壇したソ連のチェルノフは 開口一番「カトウサン（座長の加藤



写真2 開会式で挨拶する橋口組織委員長



写真3 満員の開会式会場



CHERNOV が書いた「結晶の形」と彼のサイン

範夫教授のこと) オアツマリノミナサン」と日本語で呼びかけ さらに オーバーヘッドプロジェクターの上に 彼の演題を「結晶の形」(英題は Singular Facets Stability) と書いてみせ 万場の拍子喝采をあげた。アメリカスのやや堅苦しい講演の後の雰囲気や巧みにやわらげたあたり 仲々の役者振りといえよう。講演の内容は 低指数の平坦面で囲まれた結晶の外形が 成長の条件・時間などの要素によって どのように変化するかに関する理論で この方面に興味を持つ筆者にとっては 大変意義深い話であった。

3月 28日 会場委員もアルバイトも仕事に馴れ 3会場の講演は順調に続けられている。緊張感がややほぐれるとともに 委員の間には疲労の色が目立ち始める。この日格別の責任分担のなかった筆者は やっと終日講演会場に居ることができた。大半をC会場の「Snow and Ice」および「Whiskers」のセッションで過ごしたが 午後のB会場での生物体の結晶的構造とその成長に関する招待講演は 全く別の世界のように思っていた生物体の成長にも 無生物である鉱物結晶の成長と多くの類似性のあることを知らされ 興味深かった。しかし 終日講演を楽しむかわら会場の運営の方にも気を配っていることに気付いて これも悲しい習性かと苦笑を禁じ得なかった。夜は組織委員会主催の晩さんが帝国ホテル富士の間で催された。

3月 29日 いよいよ会議の最終日を迎えた。各会場では最後のセッションが続けられている。この間 会場委員会では撤収作業の段取りが検討され それぞれの分担にしたがって作業が進められた。筆者には閉会式の運営という最後の大役が残された。

午後 3時45分 すべての講演が終わり A会場での閉会式関係の行事へと移った。最初はIOCG 実行委員のひとりであるローディス博士の閉会講演で 演題は「結晶成長における未来の要求と好機—西暦 2,000 年の結晶成長」。ふだんは早口でベランメエ口調の非常に聞き取り難い(少なくとも筆者には) 英語を話すローディスも

この日はゆっくりとわかり易く 結晶成長における将来の問題について話してくれた。

10分間の休憩の後 いよいよ閉会式を迎えた。照明を落した場内では壇上下手の緋毛氈に並んだ 5人の芸大のお嬢さん達による琴の演奏にスポットが当たる。曲は「君が代変奏曲」この間に登壇者が着席を終り 曲の終了とともに明かるくなった壇上では 砂川教授の司会で閉会式が進められた。最初は IOCG 総務幹事シーバー博士による種々の報告 次いで次回 ICCG-5 会議開催国(アメリカ)を代表して 組織委員長のジャクソン博士が ICCG-5 への招待演説を 会場となる MIT 構内の美しいスライドを交えながら行なった。最後に有住教授が閉会の挨拶を行ない 再度琴の音が「さくらさくら」の曲を奏でる中を 6日間に渡った ICCG-4 はここにその幕を閉じたのである。閉会後も会場内では互いに握手を交して再会を約束する人達 琴のまわりに集まって興味深げに質問をしたり写真を撮ったりする人達など しばし去り難い雰囲気が続いていた。

夜 パレスホテルで催された東京都知事主催のレセプションは最後の交歓の場となった。内外の参加者がくつろいで歓談する中で ようやく緊張から開放された関係者の人達の顔は どれもこれも明るかった。

おわりに こうして ICCG-4 は終了した。会期中 ストありデモありドカ雪ありと いくつかのおまけのついた国際会議ではあったが 先ずは成功裏に終始したといえよう。正直のところ心身共にヘトヘトになったが 会議を支えた多くの人達に伍して 微力ながらも自分の責任を全うできたという満足感も味わうことができた。得がたい機会を与えられた組織委員会に感謝するとともに 長期にわたり会議開催に尽力された同委員会に心から敬意を表するものである。(筆者は 鉱床部)



写真5 閉会式で ICCG-5 への招待演説をする K. A. JACKSON (U.S.A.)